

共生のきずなを求めて!

NPO
現代座

2021 年 6 月 1 日 発行
(通巻 489 号) 定価 100 円

現代座レポート No. 86

- ・いよいよ『風は故郷へ』公演 (1)
- ・『風は故郷へ』国策に振り回された開拓者たち (2)
- ・「劇場と協同の多摩研究会」 (3)
- ・「われらいずこより来たる」(1960 年) (4-6)
- ・朗読で声を出すということ 長谷川葉月 (7)
- ・お知らせ 会館日誌 会員入会・継続・寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX042-381-6987



いよいよ

『風は故郷へ』公演

少数派の歌

大の虫が生きるために
小の虫が踏みつぶされる
小さな虫が
人間であるための
新しい歌が欲しい
新しい歌を運ぶ風が欲しい
人間と歌があるとき
そこは新しい故郷なのだ

公演日程

8月21日(土)	14:00
22日(日)	14:00
23日(月)	14:00
24日(火)	14:00
25日(水)	休演
26日(木)	14:00
27日(金)	14:00
28日(土)	14:00
29日(日)	14:00

会場：現代座ホール (各回 40 人)

参加費：3000 円

Mail : gendaiza.ticket@gmail.com

コロナが治まらない中ではありますが、昨年から延期してきた「風は故郷へ」の公演を8月21日(土)から29日(日)まで現代座ホールで行うことにしました。

1年延びたことで、出演できなくなった俳優がいたり、色々状況は変わっていますし、何より8月に感染状況がどうなっているか、見通しが立たないという厳しい現実があります。何とか一歩前に進もうと思っています。

通常だと現代座ホールの客席は80人から90人ですが、今回は半分以下の40人にします。お花やお菓子などのプレゼントも申し訳ありませんが受け取ることができません。

そしていつもなら終演後2階の喫茶コーナーで語り合っ事が楽しみなのですが、それもできません。それどころか、出演者がお客様に出口でご挨拶することもできません。

そんなことをみんなで話し合っていると、舞台だけではなく、たくさんのふれあい劇場を創っているのだなと改めて思います。それでもこんな時だからこそ、いっしょに劇場に集って心を動かし、時代を見つめたいと思います。

『風は故郷へ』

国策に振り回された開拓者たち

◆忘れて欲しくない歴史

『風は故郷へ』は1980年代、北海道奥地の開拓集落を訪ね歩いて取材。1987年から1991年まで3次にわたって全国150自治体で157回上演した作品である。その頃までは全国各地に戦後開拓の集落がまだわずかに残っていた。開拓に従事した人々は戦前、戦後と国の政策に忠実に従った人々だった。

◆満州移住とシベリア抑留

1937年（昭和12）、政府は「二十年間百万戸移住政策」を掲げ、満州（中国東北部）へ開拓農民を送りこんだ。国策に従って昭和20年までに35万人の人々が満州へ移住した。大人ばかりではない、昭和13年から「満蒙開拓青少年義勇軍制度」では15歳から19歳までの少年たちが、武装開拓民として8万6千人送り込まれている。

敗戦直前になって、満州在住の成人男子は「根こそぎ招集」で陸軍に招集される。そして敗戦と同時に捕虜としてシベリアへ送られ、過酷な労働に従事させられた。

◆引揚げと戦後開拓

昭和22年から満州開拓者とシベリア抑留者の引揚げがはじまる。だが帰国しても故郷へは入れられず、政府は「緊急開拓法」を制定し、山間僻地の国有林に場所を指定し、自力での原野の開拓を指示した。

彼らは満州やシベリアでの体験を生かし、寒冷の北海道に新しい農業を興せたいと努力した。

◆高度経済成長と農業政策の転換

やっと農地が出来上がった1960年代、国策は大きく変貌する。高度成長を支える労働力を確保するため、政府は農業者の出稼ぎを奨励し、開拓農民は都会へ流れはじめた。東京オリンピックの歌声が流れ、新幹線が轟音を響かせた。だが、開拓地をつなぐ鉄道は廃線となり、1970年代には「農業構造改善事業」で、生産性の低い農地は廃村へと追い込まれていった。私が取材して歩いた1980年代には、すでに多くの戦後開拓地が姿を消していた。

◆大の虫が生きるために

ここに二人の老人がいる。二人はその場限りの国の政策に批判を持ち、「時代に逆らう少数派」と呼ばれていたが、消滅しかかった集落で助け合いを呼びかけながら小学校の分校を建て、働きつづけた。しかし、今

や分校も廃校となり、街の人々からは「いずれ廃墟になる部落だ」と噂されていた。残る農家もわずから軒なくなってしまい、運悪くリーダーの老人が腰を痛めたことで、農協からも撤退を勧告される。

国の政策に振り回されながら生き残った老人たちは「大の虫が生きるために、俺たちは捨てられた。いざこれの地も原野に戻るだろう。だが、せめて俺たちは開拓者らしく人生をまっとうしようぜ」と語り合った。

その時、遠くからかすかな歌声が聞こえてきた。

「あてのない旅を続けるよりは、あの緑の谷へ帰ろう」
ひそかに「少数派」の文化を引き継ごうとする若者たちの「協同の歌声」だった。

（木村快）

あてのない旅を続けるよりは

あの緑の谷へ帰ろう

優しいおふくろは今は居ないけれど

白いやまなみが変わらずあるはずだ

谷あいを守る鉄道も今はない

夏草に赤さびた線路が横たわる

あの頃のぼくらは汽笛に耳すませ

遙かなる世界に未来を探していた

風は故郷へ新しい歌を運ぶ

風は故郷へ新しい暮らしを運ぶ



記念対談 木村快・永戸祐三

「劇場と協同の多摩研究会」



木村 快
NPO 現代座代表



永戸 祐三
日本労働者協同組合
連合会 名誉理事

3月19日、現代座ホールで「劇場と協同の多摩研究会」がスタートしました。第1回のテーマは「劇場文化と協同を考える」。「現代座会館がどのような設備を持ち、なぜ、なんのために生まれたのかを知ろう」ということで、日本労協連名譽理事・永戸祐三さんの質問に現代座代表の木村快が答える形の対談です。

◆現代座会館の設備

現代座会館は地下2階、地上3階の建物で、会議室、視聴覚室、定員50名の小ホールを持ち、地下ホールは定員80名ですが、地下2階ぶち抜き幅広い空間を持つ劇場です。その舞台部分は中ホール並みの照明設備を備えています。

実は2019年ごろから現代座にかかわっている人々の間で、この会館の活用があり方が話題になっていて、なんとか地域社会の共有財産にできないかと話し合われていました。その中心となっていたのがワーカーズの人々でした。

◆ワーカーズとは

ここでいうワーカーズとは「ワーカーズ・グループ」、あるいは「労働者協同組合」のことで、企業に雇われる労働者ではなく、社会が必要とする事業を自分たちで出資してつくり、みんなで相談しながら働く新しいシステムです。ヨーロッパでもアメリカでも、古くから「労働者協同組合」の名称で普及しています。

それは奇しくも、現代座が70年前誕生したときからやむなく歩んだ道でした。当時は生きるために自分たちで仕事をつ

くり、協同生活することはアブノーマルな生き方だと偏見を持たれがちでした。しかしワーカーズの人々は20年前からこうした働き方を日本でも制度化してほしいと運動していました。そして昨年12月、国会において全会一致で「労働者協同組合法」が成立しました。

◆対談の内容◆

①現代座の協同観

1964年、70人の若者が財団法人・新制作座文化センターから突然解雇されたとき、マスコミからはこそつて「社会的に不要な分子」と叩かれ、「なんとしても生き抜こう」という闘いが、気がついてみると能力のあるなしを問わず、助け合って生きる協同生活だった。

②それぞれの独立

突然生まれた争議団は各人それぞれの志向があったので、みんなで話し合いながら20年以上かけ、それぞれの意思にもとづいて、「動く小劇場・風車」「ふるさときゃらばん」「希望舞台」「現代座」、そしてNPOへと独立していった。現在はNPO現代座が会館を維持している。

③現代座会館の歴史

1967年、小金井市の準工業地域に稽古場を建てたが、1972年に住宅地域に変更になり、そのため大住宅街になった。新しい住民の間で「うるさくから立ち退いてくれ」という市民運動が起こり、やむなく地下3階分を掘って、音が拡散しない劇場を造った。建設資金は全国の支持者に訴え、共感してくれた人々から小口の資金を借入し、1990年に全額返済できた。

④劇場は協同文化の原点

集まった人々の心を開かせ、心を一体化させるには肉声による劇場が必要である。これからの時代こそ、もっとも劇場が求められるのではないだろうか。

木村ノート◆われらいずこより来たる 第2部◆
1960年 激変する新制作座

木村 快

前回までの記述

★レポート81号 新劇運動の分裂

戦時中、弾圧を受けた新協劇団は敗戦後復活。しかし、左翼運動はソ連支持派と中国支持派の対立で1950年に新協劇団も分裂。中間派のメンバーは「ヴェリテ・せるくる」を設立。

★レポート82号 新制作座のスタート

真山美保はヴェリテの活動で、紡績工場の女子労働者によって劇場の魅力を教えられる。演劇観の違いからヴェリテ・せるくるは半年で解散。真山美保は草村公宣、榎村浩吉と3人で新制作座としてスタート。

★レポート83号 庶民の新劇をめざして

真山美保は自ら『民話劇・泥かぶら』を書いて上演、芸術祭最優秀賞を獲得。さらに『馬五郎一座顛末記』を書き、識者の注目を浴びる。新しい民衆演劇の研究者として知られていた哲学教授・福田定良によって広く紹介され、革新的文化人たちの支援を受ける。

★レポート84号 1959年① 不思議な学校

新制作座は中堅幹部育成のため、特別研究所を開設。福田教授に協賛する十数人の大学教授によって、演劇ではなく、変化する時代を読むための「哲学・思想史」が中心だった。それは美に不思議な学校だった。

★レポート85号 1959年② 全国巡演活動の実態

1959年夏から、炭鉱労働者と旅の一座の交流を描いた『馬五郎一座顛末記』で北海道の炭鉱地帯の巡演が始まる。これは日本新劇史上画期的なことだった。

◆木村は文芸部で働く

1960年度、ぼくは研究生から抜擢されて文芸部に所属することになった。前年度、真山美保が菊池寛賞を受賞したこともあり、新しく機関誌を発行することになったので、活版印刷で働いた経験がある便利屋の木村にやらせてみようということだったようだ。

文芸部には馬場忠、斎藤隆介といった著名な大先輩がいたが、劇団幹部の相談役のような存在で、機関誌の実務を頼むことはできない。そこで、劇団幹部の指示に従って原稿依頼の使い走りから編集、構成、印刷工場との交渉はすべてぼくがやることになった。

このため日常的に劇団幹部との接触が多くなり、雑談を傾聴することもあったから、普通の劇団員が知らない内部事情を知ることができた。また、外部の著名な人々を訪ね歩くことによって、演劇界の現状、外から見た新制作座の問題を知る貴重なチャンスとなった。

◆真山美保を話題にするときの呼びかた

ぼくが新制作座と接触し始めた1958年秋は、劇団員数もまだ40名くらいで、劇団トップである真山美保のことは「美保さん」と言っていた。実際に会ってみてもちつとも権威的な感じはなく、尊敬すべきお姉さんだった。

ぼくが正式に入団してすぐの1959年2月、全国



巡演活動の功績で第7回菊池寛賞を受賞した当時もまだ「美保さん」だった。文芸部の先輩たちの間でも「美保さん」だった。

だが、1960年11月、ワルシヤワで開かれた国際

民主婦人連盟創立15周年記念拡大評議員会に招かれ、ポーランドを訪問、帰路ソビエト婦人団体の招きでソ連を訪問し、話題になったところからはさすがに「真山さん」になったように思う。そして、1963年から「真山先生」になった。

◆1960年、安保闘争

1960年は史上最大の政治的事件と言われる「新日米安全保障条約批准阻止闘争」が展開された年である。8月に入ると、国会周辺は連日数十万の人々のデモが展開されていた。新劇界でも「安保条約阻止新劇人会議」が結成され、新制作座は劇団をあげて連日デモに参加した。日本の若者たちが、はじめて歴史というものの接点を感じた事件と言っている。

ある日、新劇人会議のデモ隊が議事堂の裏手にさしかかったとき、突然右翼団体の宣伝カーが突っこんできた。あわてて逃げまどうデモ隊に、今度は黒い制服を着た暴力団の一隊が釘を打ちつけた棍棒を振りかざして襲いかかってきた。警察の機動隊が待機していた



★木村が1960年に編集した安保特集号。「民衆と共に 芸術は立ち上がる」とタイトルをつけ、フランス・デモの情景を撮影してみた。

が、じつと動かないでその光景を見ていた。近くにいた労働者たちが旗竿を突きつけて取り囲み、集団で立ち向かった結果、右翼団体は逃げだした。

かなり負傷者が出たが、そのほとんどが女性だった。その数日後、今度は機動隊が一般市民に襲いかかるといふ事件が発生し、しかもそれをテレビやラジオで実況放送したため、世論はいつきよに盛り上がった。

◆新劇人会議デモの主力に

新劇団グループの中でも新制作座は常に50人以上の若者が参加していたから、動きも活発で注目されるようになった。

この安保闘争から、それまで沈滞気味だった民主的な文化運動は急速に盛り上がりはじめた。新劇の舞台も革命をテーマにしたものが次々と上演されたし、そういう作品であれば、これまで新劇などとは無縁だった労働者や学生が詰めかけ、熱っぽい雰囲気をつくりだしていた。

◆深夜の池袋駅で

国会での「新安保条約締結」の審議状況と併行して、深夜の池袋駅では労働者たちが居眠りしながら座り込みデモをしていた。一緒にデモに参加していた真山さんの指示で、新制作座の若い女性たちが激励のためのコーラスを歌い始めた。本来、こうした場で歌われるのは当時流行していたザ・ピーナッツの「情熱の花」だったから、あつという間に黒山の人だかりとなり、アンコールの声が鳴り響いた。実は劇団の休み時間に

は若い劇団員が好きな歌をうたっていたのだが、この歌が一番人気があったのである。こうした機転は真山美保の特徴でもあった。そしてこの出来事が新制作座に大きな転機をもたらすことになる。

◆新制作座フェスティバル始まる

劇団では予定していた真山美保の新作が出来上がらず、財政状況も逼迫してきたので、急場しのぎに新しい企画を必要としていた。いろいろ論議した結果、真山美保の構想をベースにして、歌と踊りで構成された「新制作座フェスティバル」を上演することになった。

急遽、交流のあった秋田県のわらび座の協力を受けて、日本伝統の民謡踊り「さんさ踊り」、徳島の「阿波踊り」などを習得して「日本のうた」とし、日頃から劇団で愛唱していたロシアの「収穫の歌」、黒人民謡「罪つくり」、ポーランド民謡、朝鮮民謡「娘ざかり」などに踊りを振り付けて「世界のうた」とする構成舞台とした。

とりあえずなじみの北海道で巡演したところ、それまでの巡演の客は中高年層が中心だったが、ここで一挙に若者たちが集まるようになり、翌1961年に音

楽教育を受けた若者を募集してもう1班編成する。そのうなるとコーラスと一体になって舞台で演奏するアコーディオン奏者が必要になる。ひとつの班は何とかアコーディオン奏者を連れてきて間に合せたが、もう一つの班ではなかなか適当な人が見つからず、とうとう木村にやらせてみようということになってしまった。ずいぶん乱暴な話だが、これは真山美保の至上命令だった。

◆アコーディオン奏者に転向

ぼくは劇団の音楽指導を担当していた岡田京子さんに、つきっきりの特訓を受けることになった。「楽譜が読めないから無理だ」としがるぼくに、岡田さんは「民族音楽にはもともと楽譜はないのよ。自分で思うように弾いてみるといい。楽譜なんてあとからそれを記録したものなんだから」と言う。やむなく岡田さんに何度か演奏してもらって、それを耳で覚えて繰り返し練習してみる。ロシア民謡、朝鮮民謡の好きな曲をレコードで聴きながら、それを自分流になぞってみる。

そんなわけで今度は文芸部から一転して、思いがけ



【ロシア・収穫の歌】



【朝鮮・娘ざかり】



【岩手・さんさ踊り】



【江戸まつり】

ない形でアコーディオンを演奏することになった。舞台上で使う曲はレパートリーが決まっていたし、コーラスの伴奏だから、それらしい格好をして弾いていればなんとかなった。

◆若者中心の大劇団となる

はじめは真山美保の新作が仕上がるまでの場つなぎだろうと思っていたが、この歌と踊りで構成した舞台は圧倒的に好評で、全国の労働組合や地域文化関係者からの要望がひろがり、25人編成のフェスティバル班2班が全国を飛び回り、ついに新制作座の中心活動となってしまった。そのほかに学校公演用のせりふ劇『青春』班があったから、3班が全国を巡演していたわけである。

1959年初頭の名簿では、ぼくが最後に60番目だった。それが1961年の名簿では120人を超える大劇団となり、劇団歴2〜3年の若者たちが中心活動を担っていたのである。しかも名前だけを連ねる一般の劇団と違って、給与を支給する職業劇団だから、財政も大きく膨張していたはずである。

◆新制作座は「劇場派」

なぜ劇団歴2〜3年の若者たちが主力になれるのか。演劇の上演法には大きく言って二つの傾向がある。ここでは話をわかりやすくするために、文学性の高い戯曲を舞台の上で演ずる方式を「舞台派」と呼び、観客の共感を引き出し、劇場を一体化させる方式を「劇場派」と呼ぶことにする。

もともと新制作座は芝居など滅多に見たことのない



生活者を対象に巡演を続けてきた「劇場派」である。大学生や中にも多少でも舞台を踏んだ経験があれば、視点を変えて訓練することで、半年もすれば自由に動けるようになる。歌と踊りの構成となると若者中心となるのは当然で、先輩たちはこれを動かしていく、普及班、スタッフ、渉外部門に回っていた。

多くの観察では、本来、合唱には人間の共感力を引き出す力があり、素人の方が自然な力を発揮しやすい。3年くらいたつと一つの壁に突き当たる。その段階で演出家から厳しい指摘を受けるようになる。

安保闘争後の数年間は、労働運動も高揚期にあり、それにともなつて文化活動も盛んになっていた。躍動的な歌や踊りは若い労働者たちにとってかつこの娯楽でもあった。どこへ行っても満員の客席だった。

◆国際班の編成

フェスティバル班はメーデーや政治集会など大きなイベントでは必ず引っぱり出された。そのため、外国の要人の目にとまることも多く、ソ連、中国、インドネシアとの交流も生まれ始めていた。1962年の大阪で開かれた平和集会では来日中のソ連宇宙飛行士ガガーリン大佐が舞台上に駆け上がった。ソビエト労働者文化代表団が来日したときも新制作座で交流会が開かれた。

◆インドネシア共和国からの招聘

秋に突然インドネシア共和国の文化協会からの招聘が決まった。大阪の平和大会に招聘されていた海外からの賓客の中のインドネシア代表団が正式に招聘したいと申し出たのだそうだ。出発は1963年1月と決まった。

そこで急遽、ジャワやスマトラの民謡の仕込みが始まった。クライマックスは戦時中から日本に知られていた「ブンガワン・ソロ」を大合唱に編曲し、ジャワ衣装の群舞で構成された。演奏はアコーディオンだけでは弱いので、新しいピアニストが加わった。

◆新制作座文化センターの建設へ

劇団歴3年以上には劇団員章が授与され、「これをつけている限り、一生食いつばぐれはないぞ」と言われた。そして1962年暮れ、「新制作座文化センター」の建設計画が発表された。この杉並区の稽古場を引き払って、八王子市の山間部に2万坪の土地を購入する予定であり、劇場・プール・宿泊施設のある新制作座文化センターを建設するという。建設資金は2億円以上かかるが、全国の労働組合の支援もあり、政府からの融資も実現するだろうという。

みんな歓声を上げた。だが、こうした成り行きが、やがて大きな問題を引き起こすことになることは誰も考えていなかった。

(以下次号)

朗読で声を出すということ

現代座 長谷川葉月

2015年10月に私が講師となって開講したNPO現代座「誰でもできる朗読教室」は6ヶ月間を1期としておかげさまで10期目を迎えています。昨年の4月から新型コロナウイルス感染症拡大防止で緊急事態宣言が繰り返されるなかでも活動を続けられたのは、現代座会館が表現活動の場としてずっと開かれていたおかげで、本当に有り難いことでした。この一年間の様々な朗読活動を振り返ってみたいと思います。

●『障害者白書』音読 現代座4階を録音スタジオとして使用してもらい、内閣府『令和2年版障害者白書』全文の音読作業をしました。文字を読むのが困難な人のためのマルチメディアデザイン版制作のために昨年8月～11月の4ヶ月間で、350頁ほどの分量を音読しました。作業自体は単純で、段落ごと、または1頁ごとに区切って声を録音して自分でチェックするのですが、密を避けての孤独な作業であることも加わって、取り掛かってみるとこれが難しく、なかなか自分にOKを出せない。正確なアクセントと発音、均一な息の吐き出しなど、いままでの舞台朗読とはかなり勝手が違い苦労しましたが、朗読で社会貢献活動の一端を担えた貴重な経験でした。

●武蔵野朗読会「おさらい会」 昨年12月と今年4月に私が主宰する武蔵野朗読会の「おさらい会」を3階の小ホールで開くことができました。武蔵野朗読会は、朗読の普及と発展のために2019年12月に立ち上げた会で現在会員は15名です。発足したばかりで何もし

なうちコロナ禍になってしまいました。

以前は、小さな集まりやカフェで気軽に「何か朗読を聞かせてほしい」ということがありましたが、朗読はもとより、おしゃべりさえも身近なものではなくなってしまうと鬱々となる日々。人と会話をすることの大切さを痛感していた私たちは、なんとかして、気軽に朗読できる場を作りたいたい、「おさらい会」ならば大掛かりな準備もできそうだと無観客で実施することにしました。会場や備品の消毒、手指消毒、検温、連絡先の記入、座席の間隔、朗読者との間隔、部屋の換気など、出来る限りの対策をしました。朗読は全身での表現活動ですから読む時だけはマスクを外し、ほかは全員マスク着用という形を徹底しました。

朗読する作品は、〈自分がかつて習ったことがある、または発表したことがある作品〉に限定し、自分で読みたい作品を選んで、事前練習なしで(といっても個



▲2020年12月9日 武蔵野朗読会「年忘れ朗読おさらい会」で朗読する環笑子さん
▲2021年4月24日「春＊朗読おさらい会」での筆者

々にはみっちり練習してきますけど)、当日に「ワツと集まって、朗読して、ハイ解散〜」という気軽な感じも良かったのかもしれない。マスクを外して朗読できる喜びもあったのかもしれない。お互いにマスク顔が当たり前になっていたので「久々にちゃんと顔を見られて嬉しい」という声も聞かれ、楽しい朗読会になりました。私も人前で朗読するのは久しぶりで、新たな朗読スタイルに挑戦することができました。今後も、続けていきたいと思っています。

●高齢者いきいき活動講座 小金井市社会福祉協議会から声をかけていただき、「いきいき楽々名作朗読教室」を受け持ち、4年目になります。高齢者向けの短期講座で、場所は社会福祉協議会の会議室です。コロナで声を出す講座は敬遠されるかと思いましたが、熱心な職員の方が会場を工夫して今年も(6月から)開講することができました。

巷で言われる「朗読のメリットは…」などという考えを私は持ち合わせていませんが、声を出すことで気持ちがあすつきりしたり、文学に触れて心豊かになったり、名文に感動したり、何か一つでも楽しさを味わってもらえたらと思っています。

次回講座 誰でもできる朗読教室 2021年9月期

2021年9月開講 基礎訓練から舞台発表までの12回講座

開講期間／2021年9月～2022年2月

- ①水曜日 昼クラス (原則第2週・第4週) 13:30～16:00
 - ②水曜日 夜クラス (原則第2週・第4週) 18:00～20:30
 - ③木曜日 昼クラス (原則第2週・第4週) 14:00～16:00
 - ④木曜日 夜クラス (原則第2週・第4週) 18:00～20:30
- 定員／①②④6名程度 ③3名程度 料金／受講料 20,000円
お問い合わせ (現代座) TEL 042-381-5165 FAX 042-381-6987

岐阜県富加町の実行委員会から

「ご寄付をいただきました」

富加町は1992年「朝の風に吹かれて」、93年「もくれんの歌」、95年「ニッポン人諸君」、97年「絆をつくる町」、2007年「約束の水」と、何度も現代座公演を取り組んできた町です。いつも実行委員長 井戸靖司さんと事務局局長の大塚信之さんの名「ン」で公演を成功させてきました。そして黒字が出る と次の公演の準備のために残してきました。

5月20日に突然、大塚さんから電話がありました。「体調も良くないので、残っている黒字を現代座に寄付したい」とのこと。実は大塚さんは20年以上前からB型肝炎を患いながら様々な地域の活動をしてこられたのです。「ありがとうございます」と色々お話しした数日後、井戸さんから「大塚さんが亡くなられた」とのお知らせをいただきびっくりしました。

寄付金は大塚さんの娘さんの未来（みき）さんが現代座まで届けてくださいました。未来さんは高校生の時「もくれんの歌」公演の実行委員会でお父さんと一緒に現代座を取り組みました。「実行委員会では色々な事を体験しました」と話してくれました。そして東京に来てからも現代座の会員として何度も現代座ホールに来てくれます。改めて、現代座は本当に多くの方の思いに支えられてきたことに感謝の気持ちでいっぱいになりました。



りました。

大塚信之さん、ありがとうございます

ございました。ご冥福をお祈

ります。 (木下美智子)

第5回川崎平右衛門研究会

日時：2021年11月19日（金）
11：00～16：30
会場：ルネ・こだいら大ホール
参加費・資料代 1000円

平右衛門研究会プレ集会

NPO 現代座公演「武蔵野の歌が聞こえる」DVD 上映会
日時：9月23日（祝）14：00～
会場：ルネ・こだいらレセプションホール
入場無料

現代座会館 3月～5月 活動日誌

3月2日 協同総研相良氏と打ち合わせ

15日 山本担氏来訪

21日 「現代座レポート85号」発送作業

31日 第4回現代座タスクフォース会議

4月15日 葛谷夫妻と新快塾

18日 緑町第2町会役員会

19日 現代座総会

21日 矢崎夏さん来訪

27日 協同総研相良氏と打ち合わせ

5月6日 「川崎平右衛門研究会」事務局会議

19日 「川崎平右衛門研究会」事務局会議

30日 不動産鑑定士・加川勉氏来訪

6月6日 大塚未来さん来訪

第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

【現代座ホール】

3月2～6日 劇団希望舞台「釈迦内板唄」稽古

19日 第1回「劇場と協同の多摩研究会」

4月4、17日 「演劇仲間ことのみ」稽古

22、24日 スタジオ・ポラーノ稽古

4月4、17日 「演劇仲間ことのみ」稽古

12日 現代座「風は故郷へ」稽古

5月2、4、9日 「演劇仲間ことのみ」稽古

16日 劇団希望舞台「釈迦内板唄」稽古

12、16日 「演劇仲間ことのみ」公演

17日 現代座「風は故郷へ」稽古

【三階小ホール】

3月21日 現代座「風は故郷へ」稽古

4月24日 武蔵野朗読会「おさらい会」

25日 現代座「風は故郷へ」ぬき稽古

5月1、2日 スタジオ・ポラーノ青戸稽古

19日 飯村孝夫ミュージカル教室

隔水曜・木曜日 朗読教室

毎火曜・木曜日 ヨガ教室

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）

一般会員 3,000円
協賛会員 10,000円（1口以上）
郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座